

秋田高専における韻文創作への取り組み

田 貝 和 子・工 藤 一 紘・橋 本 博 美・手 島 邦 夫

Introducing Writing a Verse into Japanese Teaching in Akita National College of Technology

Kazuko TAGAI, Kazuhiro KUDO, Hiromi HASHIMOTO and Kunio TESHIMA

(平成23年12月12日受理)

For these several years we have been teaching writing a verse as an important part in our Japanese teaching in Akita National College of Technology. So far, many of qualitatively good verses written by our students have been selected as a prizewinner in the National Contest in honor of *ISHII Rogetsu*. Introducing writing a verse into our Japanese teaching can be facilitated especially by the two among us, Kazuhiro Kudo and Kunio Teshima. This paper shows all the prize-winning verses in the past three years. From these verses we analyze a trend of students' verse writing skills.

1. はじめに

高等専門学校における国語教育の役割とは、学生の国語力の向上であろう。しかし、「国語力」と一言で言っても語彙力、読解力、表現力等、多岐にわたり、また、義務教育を終えてしまった学生たちに簡単に身につけることのできるものでもない。

本校の国語科では、俳句をはじめとする韻文の創作を授業の一環として取り入れている。そして、できあがった作品を外部の大会に応募している。これは、「表現力」に関わる分野であるが、本稿では、一般教科におけるこの取り組みについて述べる。

2. 大会応募への経緯

本校では、数年前から国語科の授業等の一環として石井露月顕彰の「全国俳句大会・秋田市短詩型大会」に応募している。「石井露月研究会」の代表である工藤が非常勤講師として本校に勤務したこと、また、翌年手島が専任として着任したとに始まる。工藤は石井露月の俳句を研究し、『俳人・石井露月』を無明舎出版から刊行している（平成23年）。また、俳句結社「俳屋」「あかね」「超雲吟社」に属し、自身の創作も積極的である。また、手島も俳句作品を定期的に発表している。このように、俳句に造詣の深い二人が揃ったことにより、「全国俳句大会・秋田

市短詩型大会」への応募が始まったのである。

3. 石井露月略歴

以下に大会名称に冠されている石井露月の略歴を記す。

俳人・医師。本名祐治。子規の近代俳句革新運動生成期に独得の位置を占め、明治・大正・昭和の秋田に近代文学の息吹をもたらした。古里では村のリーダーとして敬意を一身に集め、馬に乗って往診に回る朴訥飄逸な人柄は多くの人々に親しまれた。

露月は明治6（1873）年5月17日、草深い河辺郡女米木村（めめき・現秋田市雄和）に父・常吉、母・ケンの二男として生まれた。生家（与惣衛門）は代々肝煎り（または長百姓）を務めた家柄であったが、彼が生まれたころは維新で零落の上、戊辰戦争で焼き討ちにあい、村人は辛酸をなめていた。また10歳で父と死別した。

青雲の志を抱き明治26年秋上京。坪内逍遙の門を叩くも、文学の道の厳しさを説かれ入門を断られる。まもなく子規の知遇を得、その斡旋によって新聞『小日本』に入社。子規のもとで俳句の指導を受け、『ほととぎす』（松山版・明治30年刊）の選者として近代俳句革新運動に加わる。

「明治29年の俳句界」（『日本』新聞の連載）で子規から「露月鬼才」と瞠目され、河東碧梧桐、高浜

虚子、佐藤紅緑と並ぶ子規門四天王と称されたまさにその時、持病の脚気の悪化に苦しみ、子規と別れ、帰郷して医業に転ずる。明治32年12月1日のことである。無医村に村医として迎えられそれが同時に明治から大正にかけて猛威をふるった伝染病との闘いの始まりでもあった。大吹雪中往診途上渡頭と題して「叫ぶものに皆いのちある吹雪かな」の一句がある。帰郷した露月は『俳星』（子規命名・明治33年3月刊）を発売。『俳星』は東京の『ホトトギス』、大阪の『車百合』と並んで日本俳壇を三分した。今日創刊112周年・通巻1100号（平成24年）を数える。

明治、大正、昭和に及ぶ社会活動のユニークな仕事として農村青年の心の交流の場としての「夜学会」と「米女鬼文庫」（図書館）の創設があげられる。芭蕉の詩的ロマンを文芸的感性として捉えた露月俳風の飛躍は大正7年5月16日夭折する三女章子（あやこ）に始まる。続いて大正11年長女ツハ（18歳）、大正12年長男菊夫（20歳）と続く愛児の死の絶望的な哀しみを露月は俳風の転機とした。

晩年（昭和2年）に羽越沿線の冬の日本海の風景の中で得た「草枯れや海士が墓皆海に向く」の一句がある。死んだ漁師たちの墓は皆自分たちの生活の場であった北の荒い海を見ている。それは海というより「生」そのもの。人情と風土が深く結びついた一句で、風土的寂寥感ともいべき露月の内面が垣間見える。昭和3年9月18日、露月は自ら率先して建てた女米木小学校の校長送別会の席上、挨拶中突然の病魔に襲われ急死した。享年56。

句集に『露月句集』（昭和6年）『石井露月全句集』（平成22年）がある。

4. 大会応募

石井露月顕彰「全国俳句大会・秋田市短詩型大会」は、秋田市、秋田市教育委員会及び実行委員会の主催で毎年開催されている。後援には秋田県を始め、秋田県内の韻文に関わる会派と報道関係が名を連ねている。¹⁾

部門が「一般の部」「大学生の部」「小・中・高校生の部」の三部に分かれており、高専1年生から3年生までは「小・中・高校生の部」に、高専4年生は「大学生の部」に応募している。俳句の他、短歌、詩、川柳の部門があり、俳句以外の作品も応募している。

4.1 平成24年度応募状況

秋田高専における石井露月顕彰「全国俳句大会・

秋田市短詩型大会」への各年度の応募総数は把握していないが、平成24年度応募状況は以下、表1の通りである。²⁾

表1 平成24年度大会応募数

年	クラス	俳句	短歌	詩	川柳	計
一 年	1組	35	2	0	7	44
	2組	37	1	0	4	42
	3組	27	5	0	14	46
	4組	35	4	0	10	49
二 年	M	30	19	0	29	78
	E	27	25	0	23	75
	C	32	29	1	22	84
	B	32	0	0	0	32
三 年	M	42	6	0	12	60
	E	39	0	0	0	39
	C	35	1	0	14	50
	B	43	0	0	0	43
四 年	M	78	0	0	0	78
	E	51	1	0	2	54
	C	42	3	0	0	45
	B	27	21	1	20	69
計		612	117	2	157	888

国語科の授業は第一学年では「国語ⅠA」（現代文分野）「国語ⅠB」（古典分野）、第二学年は「国語Ⅱ」（現代文分野）、第三学年「国語Ⅲ」（現代文分野）、第四学年「日本語表現」となっている。第三学年までは、高等学校で扱う教科書を用い、第四学年の「日本語表現」は大学一年で扱う「読み」「書き」「話す」「聞く」能力を養う内容である。授業は4名で分担しているが、大会応募に関する細かな取り決めはせず、各々の裁量に任されている。そこで、それぞれが授業内での工夫により創作をさせているのである。例えば、俳句、短歌、詩、川柳のどれか一つは必ず創作する、あるいは、俳句一句はできるだけ創作する、などである。第四学年だけ俳句の応募数が多いのは、「大学生の部」では一人二首ずつ応募できるからである。第三学年までは、俳句、短歌、詩、川柳のそれぞれ一作品ずつを応募できることになっている。中には創作意欲の溢れる学生もおり、田貝の担当クラスでは、他の学生の応募用紙で二作品応募しようと試みる学生もいた。

それぞれの部門別では、「全国俳句大会」が中心であること、また、俳句は決まり事が多く、授業で俳句の説明を中心に行っていくこともあり、俳句の応募数が612句と圧倒的である。俳句と五・七・五

の文字数が同じ川柳も創作しやすいようである。短歌を創作する学生もいる。俳句、短歌、川柳は専用の応募用紙があるが、詩の場合、原稿用紙を用意する等、少々手間がかかるため、特に創作意欲が高い学生以外は応募することはない。

4.2 入賞作品数

石井露月顕彰「全国俳句大会・秋田市短詩型大会」では、大会に合わせて入賞作品及び選集作品を冊子にしている。ここ3年の大会について記すと、平成22年は9月18日（土）に秋田市雄和地域活動センターにおいて第53回の大会が開催されている。平成23年は9月17日（土）に平成22年と同じく秋田市雄和地域活動センターにおいて第54回大会が開催されている。平成24年は、石井露月生誕140年を記念して9月22日（土）に秋田県生涯学習センターにおいて第55回大会が開催されている。秋田高専学生の入賞作品等の数と応募総数は以下の通りである。

4.2.1 大学生の部

表2 第四学年入賞作品

		H22	H23	H24
俳句	選者賞	4/4	4/4	4/4
	選集作品	16/16	15/15	16/16
	応募総数	109(90)	116(100)	200(151)
	計			
短歌	選者賞	1/1	1/1	1/1
	選集作品	0	0	0
	応募総数	23(18)	15/15	25(20)
詩	選者賞	1/1	0	0
	選集作品	0	0	0
	応募総数	15(15)	0	1(1)
	計			
川柳	選者賞	0	0	1/1
	選集作品	0	0	0
	応募総数	0	2(1)	22(22)
計	147(123)	133(116)	248(194)	

表2は第四学年の学生が「大学生の部」への応募における入賞作品の数である。「選者賞」が入賞、「選集作品」は入賞に次ぐ作品である。分子部分の太字が秋田高専学生の作品であり、分母部分は掲載作品数となっている（以下同じ）。応募総数は延べ作品数であり、括弧内は人数である。俳句部門の選者は川村三千夫氏・竹内龍氏（平成22年）・伊藤青砂氏（平成23年、24年）・館岡誠二氏・石田冲秋氏の四名であり、短歌部門は藤田和平日氏、詩部門は齋藤勇一氏、川柳部門は東海林一有氏である。平成24年の秋田高専における応募数から考えると、ほとんど秋田

高専学生に応募で占められていることがわかる。大学のそれぞれの講義では、韻文の研究者が講義において積極的に創作を勧めるなどということがない限り、応募はしないのであろう。

4.2.2 小・中・高校生の部

高校生の部に応募する第一学年から第三学年の入賞作品は多岐にわたるため、大会毎に示す。

まず、平成22年第53回大会は以下の通りである。

表3 平成22年低学年入賞作品

		1年	2年	3年
俳句	最優秀賞 (1)			1/1
	優秀賞 (5)			1/2
	佳作 (69)			4/5
	選集作品 (202)		2/4	11/15
	応募総数 [215]	一次予選通過110句		
短歌	最優秀賞 (1)			
	優秀賞 (3)			
	佳作 (12)			
	選集作品 (45)			6/7
	応募総数 [63]	一次予選通過 46首		
詩	最優秀賞 (1)			
	優秀賞 (1)			
	佳作 (3)			
	選集作品 (4)			
	応募総数 [19]	一次予選通過 11篇		
川柳	最優秀賞 (1)			
	優秀賞 (2)			
	佳作 (5)			
	選集作品 (35)			2/2
	応募総数 [32]			
計 [329]		2	25	

「小・中・高校生の部」は全体で最優秀賞、優秀賞、佳作を選んでいる。「応募状況」の頁では、「応募総数」が小学生、中学生、高校生それぞれの内訳で掲載されている。そのため、入賞作品数および入賞に次ぐ作品である選集作品の総数は小・中・高校生を合わせたもので丸括弧で示した。「応募総数」は高校生のみであるため角括弧で示している。「一次予選通過」者数も高校生のみの数である。高校の部に応募している学校は秋田高専を含めて7校である。

平成22年の応募数が把握できないため、どの程度の割合で入賞しているのかが不明である。入賞作品が第三学年に集中しているのは、「教養ゼミナール」という科目において手島が韻文の創作をしていたことによる。俳句において最優秀賞を受賞しているの

は、週一回の授業における取り組みの成果である。
平成23年は以下の通りである。

表4 平成23年低学年入賞作品

		1年	2年	3年
俳句	最優秀賞 (1)			
	優秀賞 (5)			
	佳作 (60)	2/2	1/2	5/6
	選集作品 (222)	12/12	7/13	14/17
	応募総数 [437]	一次予選通過197句		
短歌	最優秀賞 (1)			
	優秀賞 (2)			
	佳作 (10)			1/1
	選集作品 (35)			
応募総数 [48]		一次予選通過 21首		
詩	最優秀賞 (1)			
	優秀賞 (1)			
	佳作 (3)			1/1
	選集作品 (5)			1/1
応募総数 [30]				
川柳	最優秀賞 (1)			
	優秀賞 (3)			
	佳作 (20)			2/2
	選集作品 (70)	2/3		3/3
	応募総数 [357]			
計 [872]		16	8	27

平成23年第54回大会では、平成22年に比べ、全体の応募総数が倍以上になっている。特に「川柳」の応募総数は桁が違うまで増えている。応募している学校は6校と平成22年よりも1校少ないにもかかわらずである。

秋田高専学生も健闘し、入賞に至らなくても大会冊子に掲載される選集作品が多くなっている。平成23年3月11日に起こった東日本大震災により、地震に関する作品が多い。詩部門の佳作入賞はまさに震災の体験を詠んだものである。詩部門選集作品は「五十音の歌」と題し、和歌の「折句」を真似、各詩句冒頭を「あ・い・う・え・お」と五十音にしたものである。これらも「教養ゼミナール」における成果である。

平成24年は以下の通りである。

平成24年第55回大会では、平成23年に比べ入賞作品はやや減少しているが、短歌部門と川柳部門において優秀賞を受賞している。詩部門において入賞作品がないのは、「教養ゼミナール」における韻文創作の授業が無くなった結果である。

表5 平成24年低学年入賞作品

		1年	2年	3年
俳句	最優秀賞 (1)			
	優秀賞 (5)			
	佳作 (60)	1/2	3/3	3/3
	選集作品 (209)	5/5	3/3	15/16
	応募総数 [423]	一次予選通過215句		
短歌	最優秀賞 (1)			
	優秀賞 (3)		1/1	
	佳作 (12)	1/1	1/1	1/1
	選集作品 (40)		1/1	
応募総数 [109]		一次予選通過 52首		
詩	最優秀賞 (1)			
	優秀賞 (1)			
	佳作 (3)			
	選集作品 (5)			
応募総数 [8]		一次予選通過 8篇		
川柳	最優秀賞 (1)			
	優秀賞 (2)	1/1		
	佳作 (12)	1/1	1/1	
	選集作品 (35)	1/2	2/2	2/2
応募総数 [139]				
計 [679]		10	12	21

5. 授業内での指導

創作作品を大会に応募するにあたり、授業内でおおまかに指導を行っている。その一例を以下に記す。工藤と田貝は金子兜太著『俳句入門』からポイントを抜粋し指導をしている。ポイントとは次の十項目である。

1. 五・七・五のリズムを大切にす。字余りはさける。
2. 字余りが出てしまったら、上五、中七へ入れる（下五は避ける）。
3. 俳句には季語ひとつ（季重なりを避ける）。
4. 季語を入れよう（切れ字も入れよう）。
5. 俳句は短くするために省略が必要。
6. 俳句は一句に何か所「切れ」が必要。
7. 取り合わせを大事に、つきすぎないこと。
8. 三段切れにしない（五七・五）（五・七五）。
9. シンプルに、題材は詰め込まない。
10. 動詞は複数使わない、形容詞を出来るだけ使わない。名詞を使おう。

以上のポイントを具体例と共に示し、プリントして全員に配布する。その裏に『国語便覧』掲載の「季

語一覧」をプリントする。田貝は浜島書店の『新訂最新国語便覧』の「季語一覧」を配布することになっている。これは、「俳句の修辞」つまり「季語」と「切れ字」についても掲載があることと、一学年において、数研出版の『クリアカラー国語便覧』を全員購入にしているためである。全員配布の『便覧』の一部をプリントするのは意味がない。俳句における季語は数限りなく、所有している数研出版の季語一覧と別の季語一覧を見ることにより、より多くの季語に触れることができるからである。

4.2 で示したように、第三学年において入賞作品及び選集作品が多くなっている。これは、創作に至るまでの授業において韻文に関わる単元を多く取り入れていることも関係していると考える。第二学年の後期後半では短歌、俳句を二単元扱っている。³⁾その後、第三学年に進級してからは、和歌に詠まれた「吉野の桜」について論じる評論文「ソメイヨシノ革命」(佐藤俊樹著)の後、詩歌の単元において萩原朔太郎の「竹」、立原道造の「のちのおもひに」などを扱い、前期中間試験に臨む。その後、芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」から日本人の美意識について論じた佐藤和夫の「蛙は一匹か数匹か」と「現代の短歌・俳句」を扱う。⁴⁾大会に間に合うように韻文創作を取り入れる場合、「蛙は一匹か数匹か」を終えた後あたりで扱うのである。以上のように、韻文に関して深く学んだ後での創作は、良い作品となるようである。

6. 創作作品の傾向

石井露月顕彰「全国俳句大会・秋田市短詩型大会」の応募締切は、例年7月中旬である。そのため、6月下旬から7月上旬に授業内で時間を取り創作し、作品を提出させている。

「季語一覧」を配布することにより、気になったことばから、創作する学生もいるが、ほとんどの学生は実感としての季節である夏を詠み込む。秋田高専の前期授業は8月上旬まで行われているが、7月に入ると夏休みが待ち遠しいようである。以下田貝の授業内で提出された作品の一部を取り上げ、創作の傾向を捉える。

6.1 俳句の創作

真夏きてこのサンダルはどこへ行く

もう心はどこか遠くへ飛んで行っているような句である。このように、夏休みを待ち遠しく思ってい

る句が多い。また、

暗闇に明かりを灯す蛍かな
川のそば夜の灯蛍かな
もはやもう写真に写らぬほたるたち

最後の句を詠んだ学生は、カメラの趣味を持っている。このように、わずか17文字の中にも、個人の嗜好が現れる。

夏の夜の蛍の他に、花火に関して詠むものも多い。

大輪の花がかがやく夏の夜
夏の夜天空に舞う一輪花
漆黒のキャンバスに咲く炎の華

花火といえば、夏祭りである。祭りと恋は学生の中では切っても切り離せないもののようなのである。

花火より光る貴方は笑顔かな
大人びた浴衣のきみに火照る頬
夏祭りたいこの音が鳴り響く

また、夏の暑さを詠む句も多く、中でも多く取り上げられるのが蟬である。

セミの声聞いているだけで汗が出る
炎昼や昼寝の友は蟬の声

季節を問わず、学校生活を詠み込む作品も多い。

春が来た授業が眠くなってくる
思い出と宿題たまる夏休み
通知表鬼灯みたいな赤一面

学生の心の動きを捉えることができるのも韻文の良さである。

太平山若葉の命あふれけり
日暮れ時扇子開きて将棋打つ
治らない六月なのに五月病

「太平山」の句は高専に入学し、登山部に入部してはじめて登った太平山の様子が生き生きと映し出される句である。二番目の句は将棋部のエースである。最後の句はしばらく注意して様子を見守りたいと思わせる句である。

季語一覧を配布することにより、ぎこちない作品も生まれる。また、季重なりも出てくる。授業内で扱ったとしても、一人一人の句を指導する時間はないため、心残りもある。

6.2 短歌の創作

短歌を創作する学生は少ないが、実感のこもった

句が多く提出されている。

我が家には詠み捨てられた本あまたうた詠むため
に役立たずある

「あまた」という古語が効いている歌である。また、
俳句同様、祭りを詠む歌もある。

風にのりほのかにひびく祭の音若松の町笑顔で
あふれる

学校のすぐ近くで催される土崎港曳山祭りのこと
である。時期も近づき待ち遠しく思っている様子が
手に取るようにわかる。

6.3 川柳の創作

川柳は五・七・五の文字数が俳句と同じであり、
季語などの制約がない。そこで、比較的創作しやす
いようである。

教室の外の風景見慣れたな
夕暮れに思い出すは我が故郷
先生とかくれんぼする違反物

一番最初の句は、一年生の作品であり、学校生活
にも慣れたのかと少し安心できる句である。二番目
の句も一年生の作品であるが、ホームシックになっ
ているようで気がかりである。最後の句は三年生で
あるが、生活態度等、少し注意深く見る必要がある
と思わせる句である。

洗濯機どれにしようか選択中
水道を直す方法ひねり出す
ネジ一本食べてしまった我が汚部屋

川柳ではことば遊びも多く創作されてくる。言語
感覚を磨くためにことば遊びの創出は重要である。

7. おわりに

韻文の創作は学生個々人の「自然の表出」であり、
その時に学生が考えていることを感じ取れる手段の
中の一つと考える。

理系の学生が数学ができるのは当然であるが、表
現力の一つとして、韻文創作をすることは、人間と
しての幅広さを養うために重要である。

高等専門学校における国語の授業は、他の高等学
校よりもじっくりと取り組む時間があるように思わ

れる。授業時間の一部を韻文の創作活動に充てるの
も有効である。

注

- 1) 後援は次の通りである。
秋田県、秋田県教育委員会（平成24年度から）、
雄和芸術文化協会、俳星社、秋田県俳句談話会、
俳人協会秋田県支部、秋田県現代俳句協会、秋
田県歌人談話会、秋田県現代詩人協会、秋田県
川柳談話会、秋田市俳句人連盟、秋田市歌人協
会、秋田市川柳協会、秋田魁新報社、朝日新聞
秋田総局、毎日新聞秋田支局、読売新聞秋田支局、
河北新報社、NHK秋田放送局、ABS秋田放送、
AKT秋田テレビ、AAB秋田朝日放送
- 2) 第一学年は混合学級、第二学年からは学科別で
ある。M: 機械工学科 (Mechanical Engineering)、
E: 電気情報工学科 (Electrical and Computer
Engineering)、C: 物質工学科 (Applied Chemistry)、
B: 環境都市工学科 (Civil and Environmental
Engineering)
- 3) 『精選現代文』東京書籍による。
- 4) 『新版現代文』教育出版による。

参考文献

- 秋田市・秋田市教育委員会・石井露月顕彰 全国俳
句大会・第53回秋田市短詩型大会実行委員会編『石
井露月顕彰 全国俳句大会・第53回秋田市短詩型
大会』（2010.9.18）
- 秋田市・秋田市教育委員会・石井露月顕彰 全国俳
句大会・第54回秋田市短詩型大会実行委員会編『石
井露月顕彰 全国俳句大会・第53回秋田市短詩型
大会』（2011.9.17）
- 秋田市・秋田市教育委員会・石井露月顕彰 全国俳
句大会・第55回秋田市短詩型大会実行委員会編『石
井露月生誕140年記念 全国俳句大会・第55回秋
田市短詩型大会』（2012.9.22）
- 金子兜太著『知識ゼロからの俳句入門』幻冬舎（2006）
浜島書店編集部編『新訂最新国語便覧』浜島書店
（2011）
- 青木五郎・武久 堅・坪内稔典・浜本純逸編『クリ
アカラー国語便覧』数研出版（2007）